春陽會ニュース

「或る友への手紙」の一節

倉田三郎

……美しきたかね仰ぎて
登りゆく
この山みちのけわしくも
あるか

御嶽のようなもったいないいたです。セザン又山、ピカソ山、ブラック山、ルオー山等の山々が、私共の現野の中に入っているのです。私の登りつゝあるのは無名の山です。何とかしてこの山の名を私の名前で呼ぶようにしたいなどと思う。

これは煩悩であり一片の野心でもあるのです。そういう煩悩や野心の混り合つたまゝともかくも一歩一歩登らねばなりません。ところが、にわかに雲霧が湧いて来て、今まで見えていた四囲の山々は皆目見えなくなり、自分の登りつゝある道さえも、さだかでなくなり、立往生を余儀なくされました。

雲霧はばれそうもありません。それどころか雷鳴を呼び暴風となり、大粒の雨さえ降つて来ました。眼鏡や地図を持参することさえ困難です。どうしようかと思う。大地を踏んまえているこの足の感覚、心臓の鼓動、過去の山登りの経験、さういうものがゴ〇ゴ〇になつて私に襲いかゝります。

意を決して登りにかゝるか、引きかえすか、天候の状況を此処で待つとするか。一か八か。

意志と知性をこんなに要求されたことはありません。

この山の向うにはミケランヂエロ山や、セザン又山やヴェラスケス山やその他の数え切れない山々がそびえ立つているのですが、私のこの山に特別同情して呉れる訳でもなく、さりとて私のこの山を嘲笑している訳でもないのです。

私は私のこの山に私の名前をつけねばならない。私の山は低いのだか、高いのだか、けわしいのか優雅なのか。

――ともかく営々として登ることしか、私は考えないしそういう運命を背負うている私なのです。……

（三三、十一）

石井鶴三足利講演

京都南次、浜田平治両氏の秋光会展（十一月一～二日）を開催中の足利市在住組合の主催で石井鶴三は主として彫刻に関する美術講演をした。尚別項列としてブッサンを出品している。講演会終了後は同人集合し石井鶴三を囲む座談会を開いた。

明年度都美審査員当について

十二月七日美術館春陽会理事会の席上会あつたが春陽会より木村荘八氏が推した、別当は本決定であるが一応日展に決定の運びとなるであろう。

☆　☆

「ヴァレリイの言葉」

"Dessin Donne Dessin."
(Kikuchiciu Gallimard, Paris)
（白井雄二郎訳　昭和三年版　筑摩書房より抜粋）

○

一つの作品を完成すると云う事は、そこから制作の跡を凡て消し去る事である。それ故に、この古風を隠匿に従たる、美術家はその作品に於て、彼のスタイルによつてしか彼自身を現はしてはおらず、作品から努力の跡が全く消える迄、努力を継続すべきである。

○

鉛筆を手にせずして或る物を見ることゝ、それを描こうとして同じ物を見ることゝの間には非常な相違がある。と云うよりも、我々はその場合二つの全く異つたものを見ているのである。我々がそれを描こうとすると、それは今迄とは別なものとなり、その物を今迄知らないでいたのであつて、それを本当に見たことはまだ一度もなかつたのを感じる。即ち我々はその時迄たゞ単に仲介の役割を務めていたに過ぎない。何かが或る物を描こうとする眼を意志で支えて、一種の指導する力を眼に与える。即ち この場合我々は意志して見ることが必要なのであつて、この意志せられた眼は素描をその目的としていると同時に、その手段としても居る。それを描くと云う事はそれに努めて注意する事であり、私が既に見ていて、よく知つていると思つていた物を著しく変換せずには措かないものである。

何故に、素描するためにはそう云う面倒なる努力が必要であるかと云うと、それは素描と云うものが幾つかの独立した器官が協力する事によつてのみ可能だからであつて、それ等の器官は常に各々の目動作用を取